

特活研究

No. 97 — 今こそ特別活動！—

2026.3 愛媛県教育研究協議会 特別活動委員会



第56回愛媛県特別活動夏季研究会に寄せて

愛媛県教育研究協議会特別活動委員会

委員長 銚 岩 俊 二

砥部町文化会館にて、第56回愛媛県特別活動夏季研究会を開催できますこと、心より感謝申し上げます。ご多忙の中、県内各地からご参加いただいた先生方、そして日頃より本研究会の活動にご理解とご支援を賜ります関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

本研究会は、文部科学省の教科調査官を講師にお招きし、国の動向や特別活動の現状と課題を共有しながら研修を深めてまいりました。この取組が、今日の愛媛の特別活動を支える大きな原動力となっていると強く感じています。また、四国地方で唯一、小学校・中学校から幹事を委嘱し、連携して特別活動の研究実践を進めている愛媛県の強みは、本研究会の誇りです。

特に今回は、文部科学省初等中等教育局教科調査官の和久井 伸彦先生（小学校担当）と佐藤 学先生（中学校担当）、そしてお二人をお繋ぎいただいた愛媛大学教授の白松 賢先生による「鼎談」という、大変貴重な機会を設けることができました。国の教育政策の最前線にいらっしゃる先生方が、特別活動の未来について多角的な視点から深く議論されることに、私も心から期待しております。

今回の研究主題は、「つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造—「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた実践を通して—」です。私たちはVUCAの時代に生きており、子どもたちには変化の激しい社会をたくましく生き抜く力が求められています。学校生活の中で、自らの生活にある答えのない課題に対して、当事者意識を持ち、対話し、決断しながらよりよくなるよう行動していく。このような特別活動の重要性は、一層高まっていると認識しています。

私自身の経験を振り返りますと、かつて生徒会活動や学級運営に携わっていた際、教師が学級や班の活動を活発にしようと努力する一方で、生徒をどこか「お客さん」のような状態にしてしまっていたのではないかと感じることもありました。私自身に、見栄えや形式にとらわれていた部分があったのだと思います。生徒が考え、決断したことを実践につなげることの大切さをしっかりと心に留め、たとえ失敗したり、回り道をしたとしても含めて、生徒を支援していく教師側の覚悟ができていなかったと、今になって反省しています。

本日ここにお集まりの皆様は、特別活動に関心があり、様々な実践に取り組んでいらっしゃるか、これから取り組もうとされている方々だと思います。本研究会を通して、小学校、中学校の各発達段階における特別活動の魅力に触れ、新たな視点に気付いたり、刺激を受けたりすることで、特別活動への熱意がさらに広がっていくことを願っています。

結びに、本研究大会の開催にあたりまして、分科会の発表、司会や記録、準備・運営に携わっていただいたすべての方々に、心から感謝申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

(小・中学校共通)

特 別 活 動

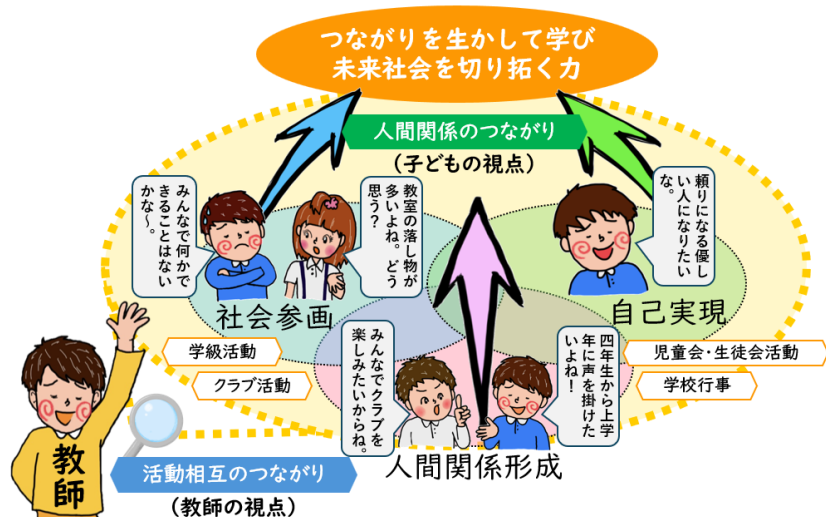
I 研究主題

つながりを生かして学び、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の創造
 —「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点を踏まえた実践を通して—

II 研究主題のとらえ方

特別活動は、これまで様々な集団活動を通して、互いを認め支え合う土壌づくりを担い、児童生徒が社会で生きる基盤となる力を育んできた。特別活動における「なすことによって学ぶ」という実践的な活動が、集団への所属感や連帯感を育み、それが学級や学校文化の醸成へとつながり、各学校の特色ある教育活動に寄与したことは言うまでもない。急激に変化し続ける予測不能な現代社会においても、学校生活がより豊かなものになるよう、教師が「何ができるか」を児童生徒と共に考え、創意工夫したり試行錯誤したりする特別活動の創造が一層求められる。

「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえ、児童生徒が様々な集団活動に自主的、実践的に取り組むことは、集団の中で個が成長し、その成長が結びつきながら集団の成長へとつながる。そこで「つながり」をキーワードに、人間関係や活動相互の研究を進める。多様な他者と協働する力やキャリア教育の中での自分らしい生き方を見詰める力を【人間関係のつながり】とし、児童生徒の教科等横断的な学びや指導と評価の一体化、小中連携を【活動相互のつながり】と捉える。ポートフォリオなどを用いて振り返りの充実を図り、所属集団の実態に合わせて生活をよりよくする活動を展開することで、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら、未来社会を切り拓く力を育成することができると考える。



III 研究のねらい

- 1 「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を踏まえて、児童生徒が多様なつながりを生かして学ぶことのできるような授業実践と振り返りについて研究する。
- 2 「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、未来社会を切り拓く力を育む特別活動の在り方を、各教科や特別の教科道徳、総合的な学習の時間等との関連を図りながら研究する。

IV 研究の視点

1 自己や学級をよりよくする資質・能力の育成

個がよりよく成長し、それに伴い集団も成長する学級活動を展開する。

- (1) よりよい人間関係を形成しつつ、よりよい生活を築く実践のための話し合い活動の充実
- (2) 協働する学級集団の中で、自己の成長を目指す意思決定の在り方
- (3) キャリア形成と自分らしい生き方を支える一人一人の意思決定の在り方

2 よりよい学校生活へ参画する資質・能力の育成

学級や学年を超えた児童生徒相互の連帯感を深める自発的で自治的な児童会生徒会活動を展開する。

- (1) 互いのよさを認め合い、主体的に取り組む異年齢集団活動の充実
- (2) 課題解決に向けて、主体的・協働的な実践を生み出す話し合い活動の在り方
- (3) 個や集団に充実感を持たせる振り返りや評価の工夫

3 よりよいつながりを楽しむ資質・能力の育成

異年齢集団での活動を通して個性の伸長を図り、体験を重視したクラブ活動を展開する。

- (1) 子どもの創意工夫を生かし、自主的、自発的な活動を生み出す指導の工夫
- (2) 地域の特色を生かし、地域の人や文化とつながるクラブ活動の在り方
- (3) 異年齢集団で共通の興味・関心をより深く追求するクラブ活動の指導と評価の工夫

4 よりよい校風を確立しようとする資質・能力の育成

創造的で躍動的な体験ができる場や時間を保障し、所属感や連帯感を培う学校行事を展開する。

- (1) 多様な他者との交流や豊かな体験活動を通して感動を味わうことのできる行事の充実
- (2) 主体的参加で、特色ある学校やよりよい校風づくりにつながる学校行事の工夫
- (3) 自他、集団の目標を肯定的に捉え、今後の活動によりよくつながる評価の工夫

V 評 価

- 1 児童生徒の実態と特別活動の目標を分析し、育成しようとする資質や能力と評価の関係を明確にして、各学校の実態に応じた評価の観点を設定する。 【評価の観点】
- 2 一連の活動の過程を重視し、自己評価、相互評価、教師の観察、児童生徒の記録、1人1台端末等を活用し、継続的、多面的、多角的、総合的に児童生徒の変容を評価する。 【評価の方法】

VI 留意事項

- 全体計画と各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、学級、学校づくりを念頭に置きながら、学校の実態や児童生徒の発達の段階等を考慮して自発的、自治的な活動が助長されるようにする。また、各教科等の特性を踏まえ、適切な関連を図るとともに家庭や地域の人々との連携を工夫する。また、それらの計画は、必ず評価を伴うものとする。
- 特別活動と特別の教科道徳は、児童生徒の心を育てる二つの大きな原動力ととらえ、両者の充実を図る。学級や学校生活における特別活動での集団活動や体験活動は、日常生活における道徳的実践の場であり、居場所づくりにもつながる。さらに、自己の生き方について考えを深め、集団の一員としての責任や役割を担うなどの社会参画の力を育てるためには、特別の教科道徳の授業との関連が重要である。両者の特質を十分理解し、児童生徒の変容を見取りながら評価を行い、道徳性の育成へとつながるよう研究を進める。
- 児童生徒一人一人が社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するため、自らの生き方を考えることができるよう、発達の段階等に応じ、小中連携を図った組織的・系統的なキャリア教育を推進する。その際、「キャリア・パスポート」を活用するなど工夫しながら、希望や目標を持って生きる意欲や態度を形成し、社会参画意識を醸成する活動等の研究を進める。
- 1人1台端末が整備され、特別活動の学習の一層の充実を図るための有用な道具としてICTを位置づけ、適切に活用することが求められている。以下のような様々な場面でのICTの効果的な利活用について実践を通して研究を進める。

〔学級活動〕 話し合い活動の促進、振り返りの即時可視化など

〔児童会・生徒会活動、学校行事〕 オンライン集会、集団決定やアンケート実施など

〔クラブ活動〕 活動記録の収集・蓄積・共有、活動発表時の動画利用など

特別鼎談「未来社会を切り拓く これからの特別活動」

文部科学省初等中等教育局教科調査官
和久井 伸彦 先生
佐藤 学 先生
愛媛大学教職大学院教育学研究科教授
白松 賢 先生

和久井 伸彦先生より

今後の学習指導要領がどうなるのかという点は、多くの先生方が最も関心を寄せているところだろう。そこで、現在議論されている内容のうち、特に特別活動に関わる部分について述べたい。文部科学省のホームページには関連資料が公開されており、昨年12月に文部科学大臣から中央教育審議会へ出された諮問文は、現状の課題を理解するための参考になる。7月28日には第11回企画特別部会も開催された。

これからの社会は予測困難さを増している。その中で大きな課題の一つが「子どもの社会参画意識の低さ」である。近年は上昇傾向にあるものの、国際的に見ると依然として低い。「政治や選挙といった社会問題について自分の考えを持っているか」という問いに対して、日本の18歳では約50%が肯定的に答えている。若者の投票率も以前に比べると上がっているが、依然として全員に関心があるわけではない。一方、中国では8割以上が関心を持っており、家庭でも日常的に社会問題を話題にしている。また、特別活動との関連で注目すべきは「自分の行動で社会を変えられると思うか」という問いに対する回答である。2016年の調査では、日本では肯定的な回答が20%未満にとどまった。子どもたちは学校や学級のために懸命に働くが、自発的に「社会を変えられる」と思う経験は乏しい。言われたことをしっかりやり遂げる責任感や勤勉さは日本人の強みであるが、これからの社会を支える子どもたちには「社会を変えられる」という実感を持てる場が必要である。小学校や中学校でそのような経験を積めば、社会に出たときにも「自分に何かできる」と考えられるようになるだろう。このために重要なのが「振り返り」である。振り返りをしなければ、活動は、やりっぱなしになり、「何のためにやったのか」「力は付いたのか」「役に立ったのか」が分からないままになってしまう。だからこそ、積極的な振り返りが必要である。

社会参画の視点から見ても、特別活動の重要性は大きい。意見表明権や参画の機会を確保するに当たり、大人は「やらせる」のではなく、子どもの「やりたい」という声を受け止め、共に考えていく姿勢が求められる。学級には多様な特性を持った子どもが存在するため、一つにまとめることは難しくなる。そこで、不安や心配を安心して表明できる環境や仕組みが必要になる。特別活動においては、今ある取組に新たな意識を加えるだけでもよい。児童会や学校行事、学級活動の中で、子どもたちが主体となってルールをつくり、学級や学校をより良いものにしていくことが重要である。こうした背景を踏まえ、特別活動を「共生社会を実現する基盤」と位置付けることが話し合われている。

社会参画に関する取組として、次の事例がある。児童会活動では、学校に「議題ポスト」を設置し、学校生活で困っていることややってみたいことを投函できるようにした。投函された意見は委員会に振り分けられ、次回以降の話合いで検討・実現していく。これにより委員会活動が充実し、子どもが「自分の意見が実現した」と実感できる。結果として「社会を変えられる」というきっかけとなり、学校生活も豊かになる。さらに、5・6年生だけでなく、全ての児童が関わる仕組みとなっている。外国籍の子どもへの支援では、生活に困難を抱える子の存在に気付いた子どもたちが「どうすれば安心して通えるか」を話し合った。一人を特別扱いするのではなく、誰もが過ごしやすい学級を目指し、名札にローマ字を振ったり、写真に名前を記入したりした。また自己紹介スピーチを通して友達を知る機会を設けた。その結果、学級全体に温かい雰囲気生まれ、助け合う姿勢が育まれた。コミュニティ・スクールでは、学校運営協議会に児童会が参画し、地域との連携に取り組んでいる。例えば「地域で挨拶運動をしたい」という提案を行い、子どもの声を地域活動に反映させている。こうした取組により、地域が活性化し、子どもは課題に基づいて自ら解決を図り「やって良かった」と実感できる。これが社会参画意識の高まりにつながり、少子化・人口減少の時代においても一人一人が当事者意識を持ち、社会を変える力を育てていくことになる。

佐藤 学先生より

様々な研究会の特別活動部会で話を聞くと、「やはり特別活動は大事だ」と語られている。一方、隣の国語部会では「やはり国語は大事」、総合学習の部会では「総合が大事」と言われている。それぞれの教科や領域が大事だと考えるのは当然であり、それ自体は重要である。しかし、その思いが「子どもの成長のどこにつながっていくのか」を見失うと、部分最適にとどまってしまう。研究は「何のためにこの教科・領域を追究するのか」という目的を意識した上で進めなければならない。大きな目的は「自立し、共生社会を担う子どもを育てること」である。これからの社会を共に生きるために、一人一人がどのような役割を担うのかを、各教科・領域で真剣に検討する必要がある。ICTの発展によって新しい価値も生まれている。メリットを生かしつつ、デメリットをどう解決するかは大人も含めた社会全体で考えるべき課題であるが、10年後・20年後の主役である子どもにどう理解させ、どう自分の人生に生かすかという視点が重要である。

自立については、共生社会と切り離せない。東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎先生は「自立とは多様な依存先を持つこと」と語っている。例えば、東日本大震災の際、車椅子を利用していた熊谷先生は、エレベーターが止まったことで研究室から逃げられなくなった。歩ける人なら階段やはしごなど複数の選択肢があるが、依存先が限られていたため逃げ道を失ったという経験である。このことから、自立とは「誰にも頼らないこと」ではなく、「多様な依存先を確保していること」と理解できる。学校教育においても「人に頼ってよい」と子どもに伝え、計画的に依存先を増やしていくことが大切である。もちろん「頼られる」場面もあり、その際に「自分はどの領域で頼られる存在なのか」「自分の強みは何か」を理解していることが求められる。

令和5年、文部科学省が大規模な調査を行った。教師約3千人、児童生徒約4万3千人、一般市

民約9千人を対象とし、義務教育修了時に身に付けておくべき能力や態度を問うたものである。その結果、教師の7割以上が最重要と考えたのは「基礎的・基本的な知識・技能」であった。教師と児童生徒の双方で上位に挙げられたのは、「他者を大切にし、多様な意見や考えを尊重する力」「自ら学ぼうとする意欲」「自ら判断する力」「自分の考えを表現する力」であった。すなわち、教師が重視する点を子どもたちも重視していると分かる。ただし一つだけ、教師と児童生徒で大きな差があった。それは「失敗を恐れず挑戦する力」である。児童生徒は第3位に挙げたが、教師は第11位であった。子どもたちは挑戦を望んでいるが、教師は相対的に優先度を下げている。特別活動の現場では、「挑戦させた方がよいが、失敗して挫折したらどうしよう」という葛藤を抱える教師が多いと考えられる。

取組事例として、ある学校では「失敗を笑うのではなく、笑う人こそ恥ずかしい」との価値観を重んじている。声を張って失敗しても、誰も笑わない。こうした文化が何十年も受け継がれており、卒業の際には子どもたちが自分の言葉でその価値を語る。ここでは「挑戦と振り返り」が必ずセットになっており、失敗した仲間に「大丈夫」「次はこうしよう」と声を掛ける場面が見られる。また別の学校では「ラジオ体操日本一」を目標に掲げ、教師の指示ではなく子どもたち自身で組織をつくり、伝統を守っている。今年のリーダーは「嫌われても構わない、伝統を守るためにやっている」と言い切った。こうしたリーダーが現れる背景には、子どもたち自身が伝統の価値を認めていることがある。この学校もまた「挑戦の後に振り返る」ことを大切にしている。挑戦を支える上で教師はどう関わるか。ここで鍵となるのが「自己効力感」である。これは「やったことがなくても自分にはできるだろう」と思える感覚のことだ。アメリカの研究者シュンクは、「学習初期の成功に対する努力帰属フィードバックは、進歩の認識を高め、学習に対する自己効力感を高める」と指摘している。つまり、教師は放任するのではなく、努力を見取り、初期段階で的確にフィードバックすることが重要である。

白松 賢先生より

これからの特別活動においては、いかに「昭和的な慣習」を払拭していくかが重要であると感じている。例えば空港や駅で中高生が体育座りを強いられている姿を見掛けるが、果たして必要だろうか。「きちんと並べ」と怒鳴る教師の姿は、周囲からは「昔と変わらない」「ハラスメントだ」と映り、軍国主義的なイメージを持たれてしまう。それが特別活動に古さを感じさせる一因ではないか。むしろ教師が子どもとこやかに行動する姿を示すことが大切である。また、特別活動に力を入れている学校で見られる「挨拶活動」などがある。そこでは子どもが教師の期待する姿に必死に適応しようとしている。さらに「感動」「涙」「絆」といった物語が繰り返されるが、必ずしも感動は必要ないのではないか。卒業式での掛け合いでは、自分の発表が終わると安堵して座り、他の子どもの発言を聞いていない様子が見られた。保護者の一部が涙を流すのを見て、管理職は「やはり泣く姿を見せないといけない」と評価したが、その場にいた私は冷めた気持ちになった。学校が「こうすべき」と思い込んでいることを変えていくことこそ、これからの特別活動ではないかと思う。

「子どもの声で変わっていく学校」こそ、求められる姿である。

さらに、学級経営を教師個人の責任にせず、学校全体で取り組むべきであると考えている。同様に、生徒指導も個人の責任ではなく、組織で担う仕組みにしていきたいと研究している。授業についても同様である。いわゆるスーパーティーチャーの授業では、子どもに演じさせるのが上手い教師が多い。子どもが教師の望む反応を読み取って応じており、見栄えの良い授業ではあるが、本当に学びにつながっているのか自問すべきである。教職大学院でも「期待される教師像」を演じている学生はいないだろうか。大切なのは、「ティーチャーエージェンシー」である。これは初めて出会う状況やどうしてよいか分からない状況に前向きに向き合う力を意味する。完璧に対応できる能力でなくてもよい。教師がそうした姿勢を示すことで、子どもたちも学校のリソースを活用しながら課題に向き合い、「生徒エージェンシー」へとつながっていく。ところが現状では、教師は挑戦を避けながら子どもには「挑戦しろ」と言っている矛盾がある。経験を「宝」ではなく「呪い」にしまっていないか。合意形成についても同様である。合意形成は非常に難しいプロセスであり、簡単にできるものではない。「自然に合意できるならそれでよい」と考える柔軟さも必要である。

2000年代以降、教師に課される課題は増え続けている。多様性を認めながら協調させ、個別最適な学びと協働的な学びを両立させる。矛盾する要求を同時に完璧にこなそうとするあまり、多くの教師は疲弊している。「ティーチャーエージェンシー」の視点では、結果よりも「どう向き合うか」が重要である。山登りに例えれば、「いかにゆっくり楽しみながら登るか」が大事であり、短期的な成果を求めるのではなく、じっくりとした成長を認めていく必要がある。多様性は短期的には分断を生みやすい。しかし長期的に馴染ませていくことで、やがて創造性へとつながる。特別活動も同じであり、1年で成果を出そうとするのではなく、数年かけて取り組むことが望ましい。長期的なスパンで続けていくことが、成功につながる活動となる。

また、特別活動が苦手な教師がいるのは、人間関係づくりに自信が持てないからである。子どもとすぐに良好な関係を築ける教師もいれば、そうでない教師もいる。後者も安心して活動できるようにすることも特別活動の役割だろう。例えば、隣の学級と合同で行うなど、工夫次第で負担を減らせる。学校づくりにおいては「効果的な学校モデル」を目指すのではなく、教師・子ども・保護者・地域が共に「支援的な学校モデル」を築くことが大切である。子どもにとって大人の言葉が響くのは、押し付けではなく、同じ方向を向いて一緒に取り組んでいるときである。押し付けられた言葉は跳ね返されるが、共に向き合っているときは素直に受け入れられる。これこそが21世紀の特別活動の姿ではないか。

佐藤 学先生より

学校や社会では対立が起こるが、それを解決する手段として「話し合い」がある。諦めたり、力で解決したり、他者に任せたりする方法もあるが、話し合いによって解決していこうとする姿勢が大切である。そのためには、教師自身が「話し合いの力」を信じられるかが問われる。話し合いがうまくいかない要因の一つとして「シンボル操作」がある。これは環境によって人の気分や行動を誘導する

ことを指す。教室で自然に「話し合いたい」と思える状況をつくるには、照明や座席配置よりも「安心感」が大切だ。「これを言っても馬鹿にされない」「笑われない」と思える雰囲気づくりが不可欠である。

岡山県玉野市立荘内中学校の事例を紹介したい。この学校は「みんなで創ろう 子どもまんなかの学校」というキーワードを掲げ、生徒主体の学校づくりを進めている。具体的には次の5点を明確化している。「①教員がレールを敷かない(失敗OKの風土)②生徒の思いを否定しない③すぐ助言せず、正解を与えない④臨機応変に予定を変更する⑤従来の取組に固執しない」である。さらに、生徒会の「学校生活向上プロジェクトチーム」が学校生活やボランティア活動について提案し、校長に具申する仕組みを持つ。生徒会費も生徒に全額委ね、予算配分も生徒が決める。校則は廃止され、「生徒会会員心得」としてICTを活用しながら全校でルールを議論している。体育祭や文化祭も生徒主体で企画・運営される。こうしたプロセスを通じ、生徒たちは「納得解」を見だし、次の代替案を考える力を身に付けている。

和久井 伸彦先生より

小学校の事例を紹介したい。ある学校では、名札に「日直」と書かれた「日直バッジ」を導入した。代表委員会で「笑顔があふれる学校にしたい」と話し合った結果である。大規模校で他学年には声を掛けづらい状況があったが、バッジをきっかけに声を掛け合えるようになった。翌年には「頑張りますバッジ」として発展し、会話がさらに生まれた。

また、コロナ禍で縮小されていた体育祭を「憧れの応援合戦をやりたい」という声から復活させた事例もある。校長は一度は却下したが、本当に必要なのかを考えるきっかけとするためだった。最終的に全校アンケートや手順を踏んで実現した。翌年には後輩たちが「全校で応援したい」と意見を出し、1年生への配慮や市役所へのテント借用など工夫して取り組んだ。さらに「お弁当を食べたい」という要望を実現するため、PTA総会にかけける文書も自分たちで作成した。こうした経験を通じて「行事はこなすものではなく、自分たちが創り上げるものだ」という意識が芽生えた。

白松 賢先生より

アメリカの児童会・生徒会選挙では、小学校4年生以上の約8割が立候補するという。理由は、高校で生徒会長を務めれば、最低限の成績があれば希望大学にほぼ合格できるからだ。そのためには中学校で生徒会長を経験しておく必要があり、さらに小学校からの流れがある。極端な側面もあるが、それほどまでに「なりたい」と思える児童会・生徒会であることが重要である。

一方日本では、学校行事の精選が「子どもの声を聞かずに」進められてきた。結果として教師の準備は楽になったが、生徒にとって負担が大きい行事が残っている。例えば愛媛県ではマラソン大会、運動会ではリレーや徒競走が中心だ。教師が準備しなくて済む行事ほど残り、子どもと教師が合意形成を重ねなければならない行事ほど削られてきた。これを復活させるのは難しいが、「行事の精選」が働き方改革の名の下に、子どもと教師双方に充実感をもたらす機会を奪ってしまったとも言える。文化祭を地域のボランティア活動として復活させた事例もある。地域の振興イベントと

して行えば参加は自由だが、結果的に全員が参加することもある。ただし休日を使うため、教師の負担増につながる懸念もある。

佐藤 学先生より

行事は「あるからやっている」のではなく、「何のために行うのか」を教師も子どもも確認すべきである。実際、とある県での食事中に聞いた会話では、高校生が「卒業式に行きたくない」と話すのに対し、祖父が「羨ましい。自分が主役の式はもう一度しかない」と諭す場面があった。高校生はその言葉を受けて「出ようかな」とつぶやいた。本人の葛藤は分からないが、少なくとも「やってもらって当たり前」「自分は主役ではない」という受け身の意識がある。行事に対する姿勢を変えるには、「自分たちで創る」という感覚が不可欠である。議論を重ねれば、うまくいくこともあれば失敗することもある。しかし、そのプロセス自体に大きな価値がある。

和久井 伸彦先生より

小学校でも、子どもに委ねられる部分は多い。ある学校では遠足の道中は安全面を教師が担保するが、現地での遊びは児童会で話し合った内容を基に実施していた。このように教師の適切な指導の下で、子どもの意見を取り入れて行事を創ることが可能である。また、日本とアメリカの違いを考えると、家庭や地域での関わり方が背景にある。アメリカでは政治や社会、地域活動が日常的に話題となり、ボランティアに関わる姿も子どもが見ている。単に「立候補する」から始まるのではなく、低学年から社会を良くする経験や意見を言って変化を実感する体験があるからこそ、高学年で「立候補すればさらに改善できる」と考えるのだろう。学校生活の「議題ポスト」に象徴されるように、「気付く目」を育てることが大切である。

白松 賢先生より

これからは若手教員が増え、特別活動の指導に不安を感じる人も出てくる。ある研究指定校では教員の7割が20代であったが、児童会が「寒さに負けない」というテーマを提示すると、それを学級活動の目標として取り入れた。児童会の提案を教師が大事に扱うことで、子どもたちのやる気が大きく変わった。また、活動の中で「嫌なことを言われた」「うまくいかなかった」といった傷付き体験を伴うこともあるが、それを完全にゼロにするのは難しい。大切なのは「結果」や「能力」ではなく「プロセス」に注目して評価することである。挑戦の成果を「できた」「できなかった」で判断せず、「どこが良かったか」「どこができたか」を互いに認め合える環境をつくることが重要である。教師が子どもにそのような声掛けをすれば、子どもから教師へのフィードバックも生まれるだろう。学級経営を個人の責任にせず、学校全体で特別活動を活用して「教師も子どもも安心できる学校」を築いていくことが、学校を楽にする鍵になるのではないか。

佐藤 学先生より

自己効力感はキャリア教育と非常に親和性が高く、特別活動の中では特に学級活動(3) 自己の生活や進路に関する活動に強く関わっている。自己効力感とは、基本的に「効力予期」、すなわち「まだやっていないけれど、自分にはできそうだ」という感覚である。これを高めるには「①遂行

行動の達成：やり切った経験や成功体験 ②代理的经验：他人の成功を観察することによって『自分にもできるかも』と思える経験 ③言語的説得：話を聞いて『自分もできそうだ』と感ずること ④情動的喚起：発表の場で極度に緊張し次の挑戦に消極的になるなど、感情に由来する影響」の4つの要素がある。特別活動は、この最初の3つに関わる経験を豊富に与えてくれる。だからこそ自己効力感を高める場となり得る。

キャリア教育との親和性が高いのは、中学3年生の進路選択において明確に現れる。未知の受験に臨むときに「やったことはないけれど、できるかもしれない」と思えるか、それとも「無理だ」と感じてしまうかは、自己効力感に大きく左右される。したがって、特別活動を自己効力感を高める視点で整えていくことが重要である。

和久井 伸彦先生より

クラブ活動は全国平均で年間9時間程度しかなく、「計画を立てる」「内容を楽しむ」「発表する」という三つを果たすのは難しい。時間をもう少し増やしてほしい気持ちもあるが、教師からは「準備が大変」「指導内容を考えるのが負担」との声もある。そこで、見栄えにとらわれず、子どもの声を聞きながら、楽しめるように計画を立てることが大切である。その際、教師は安全面や人間関係の見取りに力を注げばよい。そうすることでクラブ活動は変わってくるだろう。最終的に重要なのは、子どもたちが社会に出たときに社会参画や自己実現の視点を持ち、資質・能力を育てることである。

白松 賢先生より

教師も「失敗したくない」という思いが強いのではないか。先ほど紹介のあった「自立とは多様な依存先を持つこと」という言葉は、特別活動にも当てはまる。学級活動に置き換えると、当初は教師に助けられていた子どもが、徐々に同級生から支えられるようになり、困っているときに仲間から助言をもらえるようになる。そうした安心して困り事を話せる環境こそが大切なのである。自立と依存はコインの表と裏のようであり、失敗は成長と挫折の表裏一体である。挫折させず成長につなげるために、特別活動では「振り返り」と「再挑戦」のサイクルが必要だ。

小学校でのお楽しみ会を例にすると、「やってみたが、やらなければよかった」となることもある。しかし、まず試行的にやってみて、その後「どうすれば楽しくできるか」を話し合い、もう一度やってみる。このプロセスを大切にしたい。話し合っただけで本番にしてしまうからうまくいかないのだ。子どもは経験が乏しいため、共通理解のない中で取り組むと失敗しやすい。だからこそ、情報を与え、他校の例も紹介し、市内全体で高め合っていくことが必要である。

和久井 伸彦先生より

他校の情報をすることは非常に重要である。児童会や生徒会は伝統に縛られやすい面があるが、オンライン交流を通じて他校の取組を知れば、自校の良さを再確認でき、新しい工夫も生まれる。小学校同士の交流や、中学校の生徒会とのつながりも、活動の活性化につながる。

佐藤 学先生より

長く特別活動を研究してきた中学校の先生が、今年の4月から異動先の学校で1学年主任として特別活動に取り組んでいる。想定以上に苦労したが、1学期の終わりには変化が見えたという。近隣の小学校が研究校であり、学級活動をしっかり経験した子どもが数人いた。その子どもたちは当初「どこまで自分を出してよいか」と様子を見ていたが、6月頃から少しずつ動き出した。中学1年生の学級は4月に始まるが、小学校での経験が中学校で表に出てくるのは6月頃かもしれない。そうした時期を意識して見ることも一つの方法だろう。

和久井 伸彦先生より

滋賀県では「生徒会オンライン交流会」が行われている。滋賀県の学校に加え、徳島県や広島県の学校も参加しており、他県への広がりも期待されている。愛媛県の中学校も希望すれば参加でき、滋賀県教育委員会を通じて紹介してもらえ。ぜひ活用してほしい。

白松 賢先生より

子どもたちの学校経営への参画度は国際的に見て日本は非常に低い。この数値を10年後に上げていくことが目標である。民主主義は不完全なシステムであり、不快や失敗を内包している。だからこそ「教える」のではなく「共に学ぶ」姿勢が必要だ。子ども・教師・管理職・教育委員会が同じ立場で話し合える場がなければ、真の参画は生まれない。特別活動も「一年間で完結」ではなく、長期的・持続的に取り組むことが求められる。

佐藤 学先生より

キャリア・パスポートの活用にも注意が必要である。アメリカ・オハイオ州では受験資料として使われた結果、経歴を盛って書くことが常態化し、本来の「自己を振り返り次につなげる」という目的が果たせなくなった。日本でも単に書くだけで負担にならぬよう、学級活動(3)で教材として活用する際には、どのような価値があるのかを明確にする必要がある。

今日の鼎談では、人間関係形成・社会参画・自己実現という三つの視点から特別活動の意義が語られた。これらは特別活動を考える上での共通の視点であり、今後研究を深める際の共通言語として大切にしたい。

和久井 伸彦先生より

国立教育政策研究所の調査によると、特別活動では人間関係形成や自己実現については肯定的に捉えられているが、社会参画には課題が残る。「やらされる」のではなく「自ら取り組む」姿勢が重要である。特別活動は自己肯定感や協働、粘り強さといった非認知能力と強く関連しており、心理的安全性が確保された教室では学力にもつながると考えられている。

第1分科会「とっかつはじめのいっぽ」

聴いて、対話して、活用を考えて、ちょっと
元気になる！ことを目指して楽しく学ぶ

講師 松山市立久米中学校
教諭 高智 行志
記録 西予市立三瓶小学校
教諭 古和田さち

第1分科会では、若い先生方や特別活動に興味のある先生方で、話し合い活動を実際に体験しながら、より良い実践の仕方考えた。また、特別活動における悩みを語り合う中で、対話を通してより良い特活の在り方を模索した。

本分科会のメニューは、アイスブレイクから始まり、講話の後、模擬学級会を開いた。最後にお悩み共有&解決タイムを設け、より良い学級づくりの糧となった。

【アイスブレイク】

参加者全員がコミュニケーションをとりながら誕生日順に並んだり、1人1分間話し続けて自己紹介をしたりし、緊張をほぐすとともに、学級開きや学級内のムードを高める効果を体験した。

【講話】**・学級制の歴史**

1700年代に、モンリアル・システムという優秀な生徒を助教に定めて、他に伝達する能力別クラスの有用性から始まったとも言われている(助教法)。その後、階段教室を使って授業を行う一斉授業のギャラリー方式を経て、日本に学級文化が広まっていった。1872年「学制」、1890年「小学校令」をうけ、全国へ教育が広がり、1900年には現在と同型の学級が完成したと言われている。

・学級は民主的なコミュニティ

学級は、自分たちのことは自分たちで決めていけるのだという感覚を育む「民主的」な場であるとともに、自分たちは、環境や社会をよりよく変えていける「つくり手」なのだという体験を積み重ねる場でもある。学級を組織として見ると、大切な要素は、「共通目的(ゴールやビジョン)」「貢献意欲」「コミュニケーション」の3つである。また、学級活動については、はじめましての会をしたいという思いや、クリスマスパーティーを開きたいなど、子どもたちの「やりたい」から始まる必要がある。話し合いの活動のポイントとして「何のために話し合うのか」「何をするか」「どのようにするか」が挙げられる。提案理由が合意形成の拠り所となるので、実際に行うことや具体的方策を明確にすることは大切である。

話し合いにおいて、様々な意見を出し合い練り合った後、多数決で決めてしまうのは最善の方法とは言えない。少数派の意見も置き去りにならないよう、より民主度の高い方法を考えたり、折り合いモデルを大切にしたりしたいものだ。

【模擬学級会】

議題「研修旅行に行こう！」

提案理由

本日は、特活に意欲のある先生方が多く集まっています。そんな先生方と研修旅行に行き、季節を楽しみながら親睦を深めたいと思ったからです。
決まっていること：11月の3連休、2泊3日

自分の意見を持って伝え合うことをめあてに、活発な話し合いをすることができ、次のような意見が出た。

- ① 東北の三陸鉄道貸し切りツアー：特活を得意とするメンバーなら楽しい出し物で盛り上がる。
- ② 四国満喫貸し切りバスツアー：四国でも知らないところは多い。貸し切りバスで盛り上がりながら、季節も満喫したい。
- ③ 東・中・南予の愛媛県バスツアー：家族のことを考えるなら、いざというときに対応できる近場、しかも県内でも知らないところは多いので、県下の先生方が集まっているということで互いに地域の良さを紹介しながら旅ができる。
- ④ 山口・島根・鳥取の三県めぐり：近すぎず遠すぎず景色を満喫しながら楽しく旅行できる。
- ⑤ 屋久島や京都、福岡、大分：行ってみたいが少数意見。
- ⑥ キャンプ：特活の先生方の集まりだから楽しめそう。家族と一緒に可能な旅行。

いろいろな年齢や立場があり、様々な意見を交流することができた。子育て世代の先生方が多く、近場が良いということや、教師として地域を知ることなどは大事、特活を得意とする先生方の集まりということも考えると、キャンプも楽しめるのでは、など練り合った結果、③と⑥の折衷案ということで話し合いはまとまった。対話を続けて、少数意見を大切にしたい、民主的な学級会を体験することができた。

【お悩み共有&解決タイム】

Q： 教師のコーディネート力を高めるためにはどうすればよいか。

A： 中立の立場で高圧的にならないようにすること。教師の発言によって児童生徒の思考が流れる可能性がある。言葉に気を付け、円滑に進められるよう配慮することが大切である。また、ねらいや提案理由を振り返りながら、話し合いの本筋を見失わないように進める必要がある。

Q： 最終的に多数決で決めても良いのか、他の最善の方法はないのか。

A： 多数決は最善の方法ではない。対話を続けながらまとめていくことが理想である。多数決で決める場合があっても、少数派の権利が守られるよう配慮する必要がある。他に、ボルダー配点、トーナメント方式、問い直し、折衷案、順番型、条件をつけた考え方など、様々な方法を状況に応じて使い分けてほしい。

その他、児童会や全校児童の活動についての質問も多くあった。話しやすい雰囲気の中、熱心に学ぶことができ、有意義な時間となった。

第2分科会 小学校学級活動(1)

『つながり』の中で、
 自ら考え行動する児童の育成
 ～PDCA サイクルを意識した
 学級活動(1)の実践を通して～
 四国中央市立三島小学校
 教諭 薬師寺 一英

提案要旨

1 はじめに

昨年度の5年生の児童は自分たちの課題を学級会で話し合い、改善していく活動を2学期から行っていた。しかし、自分から課題を見付けることを苦手とし、教師主導の話し合いになってしまっていた。次年度、最高学年になる児童にとって自ら考え行動する力を育てていく必要があると感じていた。そこで、PDCAサイクル(特にCA)を意識した『つながり』と他学年の児童との『つながり』を大切にしながら活動を展開することで、児童の自ら考え行動する力を育てていくことができると考え、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) 二つの集会の『つながり』

- ア 6年生ありがとう集会におけるPDCA
 P: 6年生ありがとう集会に向けて、学級会を開き、どのような会にしたいのか話し合いを行った。児童のやる気は高く、意見は多く出たものの、経験が少なく自信がないのか、例年と同じ内容の会をすることになった。
 D: 各学年がそれぞれ出し物を行い、6年生を喜ばせた。
 C: 振り返りシートを作成し、評価や改善案を出し合わせた。会の進行、計画、話し合いや準備についてそれぞれの場面から振り返りをさせた。
 A: 話し合いの方法についての改善案や、次の会に向けて出し物のアイデアなどが出てきた。
- イ 1年生おめでとう集会におけるPDCA
 P: 話し合う前に一度紙に書いて話し合いに参加させた。6年生ありがとう集会の話し合いの際に意見が出せなかった児童も意見を言うことができた。
 D: 宣伝のポスターを作成したり、児童の主體的な活動が見られたりした。出し物も、自分たちだけでなく、全校のみんなで交流

できるような出し物を実施できた。

C: 6年生ありがとう集会の時と同様に振り返りを行った。それぞれの場面でより充実感が得られたような記述が見られた。

A: 今後の学校生活をより良くするためにどうするかを振り返りをさせた。

(2) 他学年の児童との『つながり』

縦割り班遊びにおけるPDCA

運営委員会で、縦割り班遊びの計画を立て、2学期から月に1回行っていくようになった。以前の2つの集会の振り返りが生かされている。

3 成果と課題

- PDCAサイクルを意識して、学級活動を展開することで、児童は自分の意見に自信を持つことができ、積極的に意見を言うことができるようになった。
- 事前にCAで自分の意見を持つことにより、話し合いが円滑に進み、児童主体の話し合いになった。
- 計画や実行における児童の役割の違いにより、その後の評価や対策・改善に個人差が生じた。役割に応じたより具体的な対策・改善となるように振り返り方法を考える必要がある。

研究協議

質疑応答

- 振り返りの中でしている工夫はあるか。
 → 活動が終わった後の振り返りだけだった。もっと短時間でもいいので、定期的に振り返りを入れていけばよかった。
- CAの指導の意識の違いがあれば。
 → C-できたことや成長したことを書かせる。A-改善したいことを書かせる。
 Aが出にくかったので、他のサイクルの在り方も模索していきたい。
- 失敗をさせたくないという意識が働くが、失敗を前提として活動を進めていくことも大事。その都度振り返りをしながら、より良い方法を見つけていこうという姿勢も必要である。

指導助言

- PDCAサイクルを生かした集会間のつながり・意欲の向上が、「やりっぱなし」「やらせっぱなし」を防いでいる。
- 振り返りをより効果的に行うためにも、「何を」「何のために」振り返っているかを子ども自身に考えさせることが大切である。振り返りに明確な意味を持たせ、本気のフィードバックをさせることが次の活動の意欲につながる。

第2分科会 中学校学級活動(1)

中学校における自発的・自治的な
学級づくりの在り方
～様々な「つながり」を生かした
実践を通して～

東温市立重信中学校
教諭 片山 祐貴

提案要旨**1 はじめに**

本校は、特別活動の充実に力を入れており、生徒による自治的な風土が醸成されている。本学級(第1学年)の生徒は、分け隔てなく協働して諸活動に取り組むことができる一方で、学級の自治的な雰囲気醸成に課題が見られた。そこで、小学校とのつながりを生かした学級会や話し合い活動、学校行事におけるプロジェクト活動等を考えた。また、生徒同士が関わる機会を教師が意図的に設けたり、学級会を中心として生徒自らが課題を見付け、解決に向けて合意形成を図ったりすることで、自発的に行動し、自治的な意識を高められるのではないかと考えた。

2 実践事例

- (1) 自治的な風土を高めるための体育祭に向けた取組
 - ア 学級会で決めたプロジェクトチームによる活動

小学校の係活動のように、プロジェクトチームでの実践をしたいという生徒からの要望で、本実践に取り組んだ。教室装飾係や写真係等それぞれの役割を担い、「自分たちの力」で行事を盛り上げ、つくっていくという思いが高まった。
 - イ 学級全員で作る掲示物やメッセージ作成

「仲間との関わり」を意図的に作り、関わりを通して個性に気付く活動となった。運動が苦手な児童は、自分の得意な切り絵で装飾を作り、学級のために頑張りたいという思いが全体に広がった。
- (2) 学級の絆やつながりを生かした合唱コンクールに向けた取組
 - ア 学級会を中心とした話し合い活動の充実

合唱コンクール実行委員会、学級委員長を中心に話し合いを行った。どんな合唱コンクールにしたいか、合唱コンクールを通してどうなりたいか等を話し合った。また、学級のスローガンを決め、本番まで気持ちを高めることができた。合唱コンクールで歌う曲の歌詞解釈も行い、歌声に思いをのせて歌うことができた。

イ 学級の合意形成と行事までの過程を大切にした取組

体育祭と同様、プロジェクトチームでの活動を行った。掲示物の作成では、デジタルアートが得意な生徒がポスターを作る等、それぞれの自分の強みを生かす場を設けることができた。

- (3) これまでの経験を踏まえた生徒による演劇制作

ア 生徒の声や思いを基にした学校行事の立案

例年、代表者のみで行う「小学6年生と語る会」を生徒の発案により、全員参加の劇にした。

イ 生徒の自発的・自治的な取組

劇の脚本や演技、照明等を自分たちで考えることで、自発的・自治的な活動ができ、生徒の充実感が感じられた。

3 成果と課題

- 一人一人が学級(学校)集団の一員としての責任を自覚し、前向きに活動に参加できた。
- 自分たちの学級(学校)は自分たちでつくっていくという意識が高まった。
- 自分の良さに気付き、他者との関わりの中で自信が深まった。
- 思いやりや社会性を育み、自ら人の役に立ちたいという意欲が高まった。
- 自己有用感と自己肯定感が高まった。
- 学級への所属感、仲間との連帯感が生まれ、社会性の高まりが見られた。
- 特別活動の意義・取組を共有し、広げていく必要がある。
- 持続可能性を検討する必要がある。

研究協議・指導助言

- 有限な時間を特別活動に充てるのはとても大変。休み時間やホームルームの有効活用が大切である。
- 中学校は教科担任制で、生徒一人一人を見ることが難しい。教員同士で情報共有をすることが必要である。
- 小中連携の視点で考える。小学校で係活動を経験している生徒たちの力を中学校でも生かしたい。
- 子どもたちの主体性を育むために、学校行事を上手く使いながら、社会参画・協働の学びをしていくことが今後大切になる。
- 学びの「主体」は児童生徒であることを忘れず、子どもたちに主導権を渡すことを拒まない姿勢が大事。
- 「失敗」の言い換えで「チャレンジ」など、児童生徒の挑戦を促す声掛けや言葉選びを考えていく必要がある。

第3分科会 小学校学級活動(2)(3)**集団の中での「自分」に気づき、自己実現
を図る子どもの育成**

～学級目標から自分自身を見つめる実践を通して～

砥部町立麻生小学校
教諭 安居 大貴**提案要旨****1 はじめに**

本学級は、学級会で一人一人の思いを踏まえて学級目標を「あかるい5-2のやさしさとこんじょう見せたるで〜!」に決めた。しかし、学級目標を意識した行動が乏しく、思いやりのない言動でトラブルが起こることも多かった。

そこで、子どもたちが、自分たちで決めた学級目標の達成度を考えることで、学級目標を意識しながら自治的な雰囲気をつくっていけると考えた。また、学級目標を基に、一人一人が個人目標を決めて生活することで、個人の成長が集団の成長につながることを実感させたいと考えた。さらに、個人の目標設定や振り返り、目標の再設定や調整へ教師が工夫して関わることで、子どもたちのよりよい成長につながると考え、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) 学級目標の意味と活用の経緯

(2) 第1弾 5年2組パワーアップ大計画

ア 個人目標の設定の工夫

達成度アンケートの結果を踏まえ、学級目標達成のために何ができるか個人目標を設定し、具体的な行動目標を立てた。

イ 振り返りカードの工夫と活用

目標パワーアップシートを活用し、マスを塗ることで頑張り度や成長度を可視化した。朝の会で学級目標と個人目標を唱和し、終わりの会で振り返りを行った。

(3) 第2弾 5年2組パワーアップ大計画

ア 個人目標の再設定

「優しい6年生として」できることを考え、出た意見をもとに、各自で個人目標の再設定を行った。

イ 課題を生かす振り返りカードの作成

週末に記述で振り返り、教師が朱書きを行い、児童が前向きに取り組めるようにした。

3 成果と課題

- 子どもたちは「クラスが学級目標に近付いているか」という視点を持って生活することで、自分が学級の形成者の一人だという意識が育ち、相手や周りを考えて行動しようとする雰囲気が出てきた。
- 個人目標を設定し、振り返りながら生活することで、自分を成長させたいという思いが育ってきた。第1弾のときの振り返りカードは見取りが不十分な面があったが、第2弾では文章での記述も行うことで、子どもの思いをくみ取ることができた。年度末は子どもたちが「学級目標の姿に近付いてきた」と手応えを感じていた。個々の成長が集団の成長につながることを実感させることができるような、より良い支え方を模索していきたい。
- 一人一人に合った目標設定や深い振り返りは、子どもの力だけでは難しいところがある。教師自身が一人一人に寄り添い、個に応じた支援をする力を磨き、子どもが自分自身で適切に評価できるようにしていくことが課題であると考えた。

研究協議・指導助言

- 学級目標に対して前向きに取り組むための工夫について。また、結果が出ない場合の手立てや工夫について。
 - 目標達成度を数値化し、そこに対して個人アプローチをしたのがよかった。結果が出ない児童にも寄り添い、状況に応じたコメントを必ず入れた。
- パワーアップ大計画での先生の声掛けについて。特活の取組を学校全体で共有したり発信したりしたか。
 - 学級目標の達成度から、児童に投げかけた。出た意見をもとに、個人目標を決めさせた。取組の発信についてはできてない。機会があれば学年、学校全体を巻き込んでいきたい。
- 学級目標の姿ができてきた場面を写真に撮り、クラスで共有してきた。行事では達成の姿をイメージさせた。
- 今回の実践は教師対児童だった。次は児童対児童で、教師はつなぐ役割をしたい。よい取組があれば知りたい。
 - 指定した友達のよいところを1週間見付け、伝える。
 - 目標設定時に、友達のよいところを伝え合い、自分の良さに気付かせ、自己肯定感を高める。

第3分科会 学級活動(2)(3)

課題に向き合い、主体的に生きていく
 生徒の育成
 ～進路決定に向けての学級活動(3)の
 実践を通して～

愛南町立一本松中学校
 教諭 宮崎 美保

提案要旨**1 はじめに**

本校は、生徒数58名の小規模校である。教育目標「共に生き合う」の実現を目指し、日々教育活動に取り組んでいる。生徒は進学先の選択肢が少ないためか、進路選択を自分事として捉えたり、進路に向けて自己を高めたりしようとする意識が低い。そこで、生徒一人一人が、今どう生きるべきかを考え、目標を具体化し、自己実現を図っていく活動を展開していくことで、キャリアプランニング能力を育成していくことができると考え、本主題を設定した。

2 実践事例**(1) 主体的な進路決定につなげるための手立て****ア レジェンド交流会**

平成31年度から、一本松出身または在住で活躍する方を招く「レジェンド交流会」を行っている。講演を通して、生徒は、地域に誇りを持ち、将来社会に貢献できる人材になりたいという思いを強くしている。

イ 南宇和高等学校の生徒との交流会

南宇和高等学校の生徒に学校生活や総合的な探求の時間で取り組んでいる活動などについて説明していただいた。生徒は具体的な進学へのイメージを持つことができ、実感を伴った理解につながった。

ウ 南宇和高等学校南光叶夢センターの講師による交流事業

「働くことと学ぶこと」を題材に、南宇和高等学校内の学習センターである南光叶夢センターの講師による交流授業を行った。講話や意見交換、スモールディスカッションを通して、生徒たちは職業への多様な価値観を持ち、自分の考えを持って、学習することに意味を見出すことができていた。

(2) 「レベルアップ大作戦！」の取組**ア 「今」を見つめる学級活動(3)の授業**

交流授業を通して得られた考えを生活の中で実践につなげるために、これまでの自分を振り返って課題を捉え、さらに成長するための具体的な実践目標を決定した。目標達成のために「レベルアップ大作戦!月間」を設定し、毎日自己評価を行った。

イ 振り返りと新たな目標設定

一年間の学活の授業を振り返り、自分が将来のために頑張ったことや、高校生になって将来のために頑張りたいことを記入させた。将来の自分の姿を描きながら、今の自分に必要なことを今後も継続して実践していくことの重要性を確認した。

3 成果と課題

- 高校生との交流や交流事業を通して、多くの生徒が将来像をより具体的に描けるようになった。また、学級活動(3)の授業を通して、自分の強みや課題に気付き、より良い自分になりたいという気持ちが育った。これらの経験は、生徒たちが将来のために今どのように過ごしていけばよいかを明確にし、学ぶことの意義が再確認でき、前向きな取組につながった。
- 今後は、年間指導計画を見直し、他教科との連携を意識して、生徒が生き方をデザインするキャリア教育の充実に努めたい。また、近隣の小学校と連携し、生徒の発達段階に応じた体系的なキャリア教育を行っていく必要がある。

研究協議・指導助言

- 生徒が主体的に取り組むために、朝の会の時間を活用して生徒に投げかけるなど、日頃から将来に必要な力について説明を行って、意識づけを行っている。
- 今後同じような取組を行う際には、お互いに班でその日の振り返りを見直すなど、生徒同士のつながりを利用して、互いの頑張りを見取る活動を取り入れていくのもよいと感じた。
- キャリアパスポートの活用が学期の初めと終わりのみで、その間の活用が難しい。小学生時代の自分を振り返る時間を設けたり、もう少し細かい期間で定期的に目標への価値づけを行ったりするとよいのではないかと。

第4分科会 児童会活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事

子どもの主体性を育む児童会活動の在り方
～全校児童が参加する「よしふじ会議」での
主体的な話し合いを通して～

鬼北町立好藤小学校
教諭 松本 治土

提案要旨

1 はじめに

本校は、自然豊かな鬼北町にあり、児童数37名の小規模校である。教育目標「強く、仲よく、美しい心の児童の育成」のもと、日々、協力的な家庭や地域と連携しながら児童の育成に取り組んでいる。

児童は全体的に仲が良く、休み時間には全員で仲良く遊ぶ姿が多くみられる。一方で、自分のことを優先するあまり他者の立場になって物事を考えることができづらかったり、学校生活において自分の意見を強く主張しすぎたりする一面がある。

本校では、月に一度、全校児童が参加する「よしふじ会議」で学校生活の様々な問題点について話し合いを行っている。教師は会議の前に児童会で話し合いの方向付けを一緒に行う。その時々各学級から提示される課題について、児童が主体となって話し合い、解決策を模索している。全校児童が参加し、主体的な話し合いをする中で、よりよい学校生活を送ることができると考え、本主題を設定した。

2 実践事例

(1) 旭川荘南愛媛療育センターとの交流

ア 交流の仕方についての話し合い

よしふじ会議で出された主な意見は、「笑顔を絶やさずゆっくり大きめに優しく話し掛ける」「車いすを押すときは、ゆっくり話し掛ける」「『段差がありますよ』などの声掛けをする」「言われて悲しくなることは言わない」などの意見が出た。振り返りでは、3～6年生の児童全員が、よしふじ会議で話し合った経験がとても役に立ったと回答した。

イ 交流の具体的な内容

- ・プレゼント
- ・感染症対策

(2) 学校生活で起きる様々な課題の解決

ア ポストの設置による要望収集

収集した意見は、「よしふじ会議で話し合っしてほしいこと」「話し合いはしないけれど、伝えておきたいこと」の2つに大別され、児童の意見を収集した。

イ 課題解決のための話し合い

収集して出てきた主な課題は、「廊下や階段の歩き方が悪い」「掃除の仕方に気を付けてほしい」「遊びの中の文句などのトラブルをやめてほしい」などが挙げられた。学年ごとに意見を出し合い、児童会役員がまとめ、解決を図った。

3 成果と課題

- 本校と南愛媛療育センターとの交流活動は30年以上続いており、南愛媛療育センターの入所者には、重度の身体障がいの方もおられる。その方々とどのように接していけばよいのかについて、6年生が各班の司会を務めながら話し合いを進め、全校児童が接し方について共通理解を図ることができた。
- 感染症が流行したこともあり、交流の実施はできなかったが、施設の代表者に、6年生が代表してプレゼントを渡したり、自分たちの思いを伝えたりすることはでき、活動の充実感につながった。
- 話し合った解決策の実践に課題が残っていることが、学校生活アンケートから分かっており、今後は、実践につながる解決方法を、全校児童が主体的に考える場を工夫し、研究する必要がある。

研究協議・指導助言

- よしふじ会議は月に1回実施し、短い時間でも行っている。会議は特別活動主任が中心となって行っているが、教職員での分担も進んでいて、協力体制が築けている。会議のフィードバックは、以前は各代表者が話し合っていたが、現在は、その場で全校児童に行っている。
- 1年生も会議に参加するが、意見はほとんど出ることはない。しかし、司会の進め方や意見の伝え方などを直接学べる良い機会となっている。
- 30年以上続く南愛媛療育センターとの交流は、好藤小学校だけが行っている。多くの同世代の児童生徒と関わりを持ってほしい。重度の障がいがあり、会話も難しい児童であっても、そこから、どう児童の心が成長していくかに期待が持てる交流となっている。
- 児童たちの願いを叶えたいという思いの会議であるが、自分たちの「おもしろそう」という感情のみの意見もあり、本来の目的が達成できていないこともある。どういった思いが隠されているかを児童自身に考えさせ、目的意識を明確にし、より深い合意形成を図りたい。

第4分科会 児童会活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事

自立自存を目指した特別活動の在り方 ～地域資源を生かした学校行事の充実～

西条市立西条南中学校
教諭 十亀 敬太

提案要旨

1 はじめに

本校は、生徒数382人の中規模校である。教育目標「夢を語る生徒の育成」の具現化を目指して、日々教育活動を行っている。体育大会や文化祭などの学校行事には地域の方が多数参加されている。地域の人的、物的資源を生かし、行事の充実を図るとともに、生徒が企画、運営に携わりながら主体的に活動することを通して、自ら考え行動する意味を込めた「自立自存」の校訓を体現していくことにつながると考え、本研究主題を設定した。

2 実践事例

(1) 歩くぞ28km

加茂川沿いから黒瀬ダムに向かい、1日かけて28kmを完歩する伝統行事である。自分の力で最後まで粘り強く取り組む態度を育てること、自然に触れ、地域の良さや地域の人々とのつながりを大切にしようとする気持ちを育てること、仲間と励まし合い、互いを思いやる心を育むことを目的としている。地域の方が交通整理をしてくださったり、生徒と一緒に歩いてくださったりするなど、地域をあげての取組となっている。地域の自然のすばらしさや地域の方々とのつながりを再確認できる行事となった。また、最後まで仲間と歩き切ることで、達成感を味わうことができた。

(2) 手作り弁当の日

子ども自身が弁当を作ったり、弁当作りに関わったりする日である。自分自身で作ったり、自分が食べる弁当作りに関わったりする体験を通して「生きる力」を育むことを目的としている。

ア お弁当計画シート

1週間前に学級で説明し、プリントを配付、記入する。弁当を食べた後、振り返りを行う。

イ 手作り弁当当日

手軽にできる料理を弁当箱に詰めるコースから、思い切って全部自分で作るコースまで、五つのレベルのコースを選択して実施する。朝4時に起きて弁当を作った生徒もおり、弁当作りの大変さ、保護者への日頃の感謝を感じられた行事だった。

(3) 人権啓発劇

ア 生徒会役員によるシナリオづくり

文化祭の人権啓発劇の上演に際して、生徒会役員が創り上げたシナリオの下、地域の方による演技指導等の御助言をいただきながら練習に励んでいる。7月中にテーマ決定、夏休み中にシナリオ作成、9月にシナリオの修正・完成、10月に練習スタート、11月文化祭当日という流れで実施する。参加した生徒にとっては達成感と人権意識の高まりを感じる行事となったとともに、劇を鑑賞した生徒も人権に対する関心が高まるという教育的効果が得られた。

イ 一人一役

参加生徒は、キャスト、照明、大道具・小道具、音響の4つの役割に分かれる。キャストは9月までにオーディションを行い決定する。

3 成果と課題

- 感想には、地域の魅力を再認識したり、地域の方とともに活動することへの喜びを表したりする様子が見られた。
- 人権啓発劇においては地域の方の御指導を仰ぎ、キャスト・スタッフが一丸となって差別解消のために自分にできることを考え、行動につなげようとする意識の高まりが感じられた。
- 地域の方々の見守り、指導する姿が生徒たちにとっては見慣れた光景となってしまっており、改めて感謝の気持ちを高めたり、地域の一員として安全・安心な生活につなげようとする意識を強めたりするまでに至っていないと感じられる。

研究協議

質疑応答

- 人権啓発劇の教員の役割分担について
以前は生徒会担当が全てを担っていたが、今は全教員で協力している。
- 事例以外の地域とのつながりについて
年末年始に七草作業体験アルバイトを希望制で行っている。

指導助言

- 前年度の活動を振り返った上で、今年度の活動を考えることが大切である。
- 主体性は他者との関わりの中で育つという考えの下、「主体的な子ども」の育成に携わってもらいたい。

第56回愛媛県特別活動夏季研究会 アンケート結果より

1 特別鼎談について

特別鼎談について、「大変勉強になった」「新たな気づきがあった」と好評な意見が多かった。特に、日常の学級経営や特別活動にすぐ活かせる具体的なアイデアや視点を得られたという意見が多く見られた。一方で、一部からは「時間が足りない」「もう少し事例を深く聞きたかった」といった声もあり、内容に満足しつつも、より掘り下げを求める意見があった。

○ 意見の抜粋

- ・ 新しい気づきがたくさんあり、とても素晴らしい時間となりました
- ・ 子どものやりたいを捨て、助けてあげられる先生になりたいです。また、子どもが自分の力でクラスや学校が変わった！と思えるような活動をさせてあげたいです。
- ・ 「失敗を恐れず挑戦する」という言葉が印象に残っています。子どもが自分たちで創り上げる主体性を育むことができる声掛けや取組を考えていきたいと思いました。
- ・ 学級経営における教師と子どもとの在るべき関わり方のヒントをいただきました。特に学級会でのまとめる段階では、合意形成を図るのは大人でも難しいという考え方から、毎回綺麗に話し合いで決めることは難しいと気付かされ、少しでも子どもが納得できる決め方を提案したいなと思うようになりました。
- ・ 特別活動は、振り返りを通してバージョンアップをさせることが大切だと学びました。児童から出た改善点をチャンスだと思い、よりよいものにしていきたいと思います。
- ・ もっともっと、子どもに任せる部分、子どもの考えを引き出して、子どもの手で実現させていく場面を増やさないといけないと思いました。そして、何より昭和臭をどんどん消していかないといけないと思いました。
- ・ 鼎談は、時間配分やつながりが難しいと思っていましたが、白松先生が上手く流れを作っていたので、それぞれが具体例なども出してもらいながら話してもらったので、とても興味深くあっという間の2時間でした。
- ・ 時間が足りず、もっと深く聞きたかった。

2 分科会について

分科会では、どの会でも「実践的」「すぐに使える」「参考になった」という声が多く寄せられていた。特に、模擬授業やワークショップ形式の分科会は、参加者の理解度を高め、翌日からの授業改善に直結していると好評であった。一方で、一部では「説明時間が短い」「参加者が多く発言しづらかった」といった指摘も見られた。

○ 意見の抜粋

- ・ 今後、実践できそうな活動を、たくさん取り入れていただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 実際に使えるものが多くありがたかったです！
- ・ 初めての参加でしたが、次回もぜひ参加したいと感じました。日頃の学級会等にも活かしていきたいです。
- ・ 実際に学級会をしたり、悩みを解決させていただいたり、とても勉強になりました。2学期からすぐにかきたいです。

- 今年度は、特別支援学級を受け持ちながら特別活動主任として学校行事や児童会運営、コミスクの運営に携わっています。「誰1人取り残さない」ということが、いかに難しいことが痛感しています。全校そして地域一体となって取り組んでいけるよう、今回の分科会の学びを活かしていきたいです。
- 先生の実践を聞いて、学活で振り返りを十分にできていなかったことと、振り返りを改善に生かすことができていなかったなと思いました。振り返りを次に繋げることで、子どもたちが自ら考え行動することにつながるのだと学び、もっと繋がりを意識したいと思いました。
- 振り返りの大切さを再認識しました。子どもたちが成長していくためには、目標があり、目標に向かって努力している過程が大切であると感じました。そのために、子どもたちが努力している自分たちのことを知り、改善していくために振り返りを行事ごとではなく、小刻みに行うことが重要であることを学びました。自分の役割を果たすことができたか、今日上手くいったけど、もっとうまくいくためにはどうすればよいかなど、本気のフィードバックを目指して2学期からも取り組んでいきたいです。

3 要望について

運営のお礼や、スムーズな進行への賞賛が多かった。要望意見は、大きく分けると「参加促進と発言しやすい場づくり」「運営・進行の改善」「会場・環境面の配慮」の3つに分けられるのではと思う。

- 意見の抜粋「参加促進と発言しやすい場づくり」
 - もっと多くの先生方に参加していただきたい会だと本気で思った。
 - 文科省の調査官や白松先生がお話されるのは貴重な機会でしたので、鼎談や講演だけでもいいから参加を促せるといいのかなと思います。
 - 午後からの研究協議でなかなか意見や質問が出ずに司会者が困っている場面が見られたので、せっかく参加してもらった方により多く発言してもらえる工夫ができるといいと思いました。各分科会の最初に「とっかつはじめの一步」でやっているようなアイスブレイクをちょっとだけ取り入れて、会場に発言しやすい一体感を作るとか、参加申し込みのアンケートの中に日頃特活で上手くいかないことや疑問に思っていることなどを書いてもらっておいて司会者に一覧を渡しておくなどできるように思いました。
 - 専門の先生がせっかくいらっしゃったので、質問もしてみたかったです。
 - 学級活動に取り組んでみて聞きたいことが、いつでも相談できる体制があったらいいなと思いました。
- 意見の抜粋「運営・進行の改善」
 - 鼎談のプレゼンが見えづらかったです。
 - 分科会ごとの受付で、自分がどの分科会に申し込んだか忘れていらっしゃる先生方も少なからずいらっしゃいました。分科会に入るときに名簿をチェックするというのもなかったので、運営上支障がないのであれば、受付は東予・中予・南予に分けるなどしておく方が分かりやすかったのではないかと思います。
- 意見の抜粋「会場・環境面の配慮」
 - 仕方がないことではありますが、猛暑の中、駐車場と会場とを上り下りするのはいらいものがありました。
 - 前日準備について、分科会会場が事前に準備できないのは問題。鼎談の机配置などは事前確認・確定しておくべき。前日準備で会場に入れない場合、下見で詳細を確認し、当日朝の準備を見越した計画が必要。会場使用に伴う時間・費用を事前に把握し、必要なことに時間と予算を集中させる計画が必要。